

何が変わったのか？ 性感染症の動向

企画にあたって

泌尿器科医は、性感染症を診察しなくてはなりません。なぜなら、たとえ感染症内科が感染症全般を診療する時代がくるとしても、外陰部に病変が生じた患者さんは、泌尿器科や産婦人科を受診します。また、感染症内科の主たる診療対象は、重症感染症、敗血症、輸入感染症、昆虫（動物）媒介感染症など多岐に渡るからです。

従来の性感染症といえば、クラミジア・トラコマティスと淋菌、性器ヘルペスと尖圭コンジローマ、それにマイコプラズマ・ジェニタリウムを知っていたら十分だったかもしれないのですが、近年の梅毒報告数の急増により、私たちは、さらに梅毒をも念頭に置いた診療をしなくてはならなくなりました。梅毒は典型的な外陰部の症状のみであれば容易に診断できるのですが、リンパ節腫脹など「もしかして悪性腫瘍…」と考えがちな思考の向きを、少し修正する必要に迫られています。

ただし、梅毒ばかりが注目されて話題になっていますが、実は梅毒よりも報告数が多い性器クラミジア感染症と淋菌感染症も、それぞれ知っておくべき点があります。また、性感染症は混合感染することが知られていますので、性器ヘルペスや尖圭コンジローマについても知識をもつ必要があるでしょう。そもそも予防のためには、疫学や予防教育についても知っておきたいところです。

性感染症については、系統的な診療の訓練を受ける機会が少ないことも問題です。ですから、本特集は机上の知識ではあるものの、私たちにとって必要な知識を得る貴重な機会であるにとらえていただき、目を通していただければと思います。病院でもクリニックでも感染症の患者さんを診療する機会が日常的にあります。性感染症の感染制御のためにも、1人でも多くの泌尿器科医が本特集を通して性感染症に興味をもっていただけたら、（少なからず）目的達成です。

札幌医科大学医学部
感染制御・臨床検査医学講座

高橋 聡